考古学研究所アルカ提供

Archaeological Laboratory,Co.,Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.257
2025.2.1

＊考古学研究所（株）アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと

ひたちなか市史跡虎塚古墳等の調査と保存

鴨志田 篤二

第1回 ◆ ひたちなか市の地勢と文化財保護の歩み（1）◆

ひたちなか市は1994（平成6）年11月1日、旧勝田市と旧那珂湊市が合併して誕生した市（事象・名称は、合併前の旧市名で表記）、茨城県の東部に位置し、東には広大な東海阿字ヶ浦砂丘が拡がる。市域の南西側は栃木県の那須岳に源を発する那珂川によって、県都水戸市と市境をなしている。北側は茨城・福島・栃木の県境に聳える八溝山北麓を源とする清流久慈川が流れる。久慈川右岸に位置する東海村・那珂市と那珂川左岸台地の本市域を含め那珂台地を形成している。

那珂台地の東には、式内社酒列（さかつら）磯前（いそざき）薬師菩薩神社大明神が、また、海岸には同神社の神磯、護摩壇石が在る。一方、北西側の那珂市静には、式内社常陸二の宮静神社（名神社）が鎮座する。この静神社から出発し、那珂台地の48ケ村の人びとが神輿を担ぎ、護摩壇石に行く浜降り神事と東海村村松大神宮から磯前神社への水戸競馬がある。那珂台地の壮大な祭りであるが、1929（昭和4）年を最後に斉行されてない。

市域には那珂川の支流、大川・中丸川・本郷川が北西から南東に流れ、谷津田を形成している。

また太平洋を望む磯崎～平磯海岸には、北東に傾斜した硬い岩礁がみられる。1954（昭和29）年4月、大木信雄により那珂湊層の岩礁からアンモナイトの化石を発見し、採集する。採集されたアンモナイトは通常の「平巻き」のものではなく、「異常巻き」のもので、白亜紀後半に日本列島各地で見られる。那珂湊層産出のアンモナイトも白亜紀後半（約7500万年ごろ）の時期である。

さらに、大木らは、茨城大学地学会の恩師たちと、日本での地質学・古生物学の創始者、矢部長克（東北帝大）を現地招聘し、地層の再確認を行っている。

那珂湊白亜紀層からはアンモナイト化石ほか、ウニ、首長竜の一部の化石なども産出されている。

また、本域における動・植物相は、南限・北限種がみられ、海岸の砂丘に自生するオオウメガサソウ、コハマギク、ハマナス、シロヨモギは南限種、北限種はツワブキ、タブノキなどがみられる。とくに、オオウメガサソウは、最南限種で、ハマナスは、鹿嶋市大小志崎の自生地が国の天然記念物指定を受けている。

魚類は、那珂川のサケ、那珂川河口で合流する涸沼川のニシンは、南限種であるが最近の温暖化・東日本大地震の影響で著しく減少している。

このような自然地形・環境に恵まれ、市内には、原始・古代からの多くの遺跡が残されており、その保存と活用が図られ続けられてきた。

本市域の遺跡を概観すると、旧石器時代の遺跡では、区画整理事業に伴う調査で、武田石高遺跡などがある。ローム層中における鍵層のAT火山灰層の検出、その上・下関係から確認したナイフ形石器文化は茨城県の標式資料となっている。

旧石器時代末期の層（後野B）から発生期の土器を伴い調査された（後野A）後野遺跡があげられる。ローム層の堆積は厚くはないが細石刃を文化層とその上位層の無紋土器を伴う大型石刃文化が、地層を異にして調査された。とくに細石刃文化層は荒屋型彫器を伴い、その分布は南限に位置している。

縄文時代の遺跡は、那珂川及びその支流によってつくられた汽水湖を望む台地につくられた貝塚群があげられる。なかでも三反田蜆塚貝塚は、明治時代に発見され多くの研究者の訪れているところである。とくに、市内貝塚や周辺遺跡の調査を生涯続けた藤本弥城の研究は高く評価される。

弥生時代の遺跡は、市内各地で発見され、古くから注目されているが、東中根遺跡群は広大な面積のなかに拠点的な遺物出土地点が確認され、調査が行われている。東中根大和田遺跡からは多量の炭化米、アメリカ式石鏃などが検出されている。古墳時代の遺跡は、市内に存在する多くの古墳の墳丘から出土する埴輪は注目される。1963（昭和38）年に発見された馬渡埴輪製作遺跡の調査は、古代窯業を解明する重要な調査となる。奈良・平安時代の遺跡は、市内各地で発見され、中根虎塚古墳の装飾壁画、殿塚古墳（旧金上古墳）の陰刻壁画の存在は、わが国の装飾古墳文化を究めるうえで重要である。

▲ひたちなか市の史跡

水戸藩第2代藩主徳川光圀によって『大日本史』編纂事業が進められる。江戸藩邸に修史編さんの「彰考館」を設置し、本格的な修史編さん事業に取り掛かる。『常陸国風土記』は、光圀により、その所在が確認され、水戸藩士による書写・上梓が行われ、古墳時代から律令期における重要な基本文献となっている。

とくに、那珂湊は、水戸城下から10キロ隔たる那珂川河口に位置し、水戸藩の、軍事・経済・教育の中心である。水戸藩初代藩主頼房は砲台設置、光圀は異国番所（海防見張番）・御船倉の設置、夷濱閣の建設などを行い、9代藩主斉昭は、那珂湊郷校「敬業館」の開設、反射炉の建設などを行う。これら、歴代藩主によって建設された施設は、水戸藩の内乱である元治甲子の内乱で悉く灰燼に帰した。反射炉は、那珂湊市東吾妻ヶ丘に建設された鉄製大砲鋳造施設である。水戸藩内外の英知を集め、1855（安政2）年に一炉、同4年に一炉、計2炉を建設し、完成する。1864（元治元）年の元治甲子の乱で倒壊したが、1937（昭和12）年、弁護士深作貞治らの資金援助と市民の協力のもと現地に復原された。また、1936（昭和11）年に江戸小石川水戸藩邸の勅使門を陸軍省より払い下げ移築している。反射炉建設跡地に移築された歴史的意義も大きい。

史跡馬渡埴輪製作遺跡、同虎塚古墳、同十五郎穴横穴群の史跡指定の重要な遺跡が狭い区域に立地しているのは『常陸国風土記』等に記載されている蝦夷征討記事に関連している遺跡であろう。

※巻頭連載は隔月です。次回は鈴木正博さんです。

目　次

■故郷茨城県の文化遺産を護り続けた人びと（第1回）　鴨志田篤二 …1
■考古学の履歴書 考古学とともに歩む（第19回）　山本暉久 …2
■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト（第249回）　松田　繁 …3
■考古学者の書棚「歴史と風土の中で 山本学治建築論集①」　奥野麦生 …4

考 古学の履歴書

考古学とともに歩む(第19回)

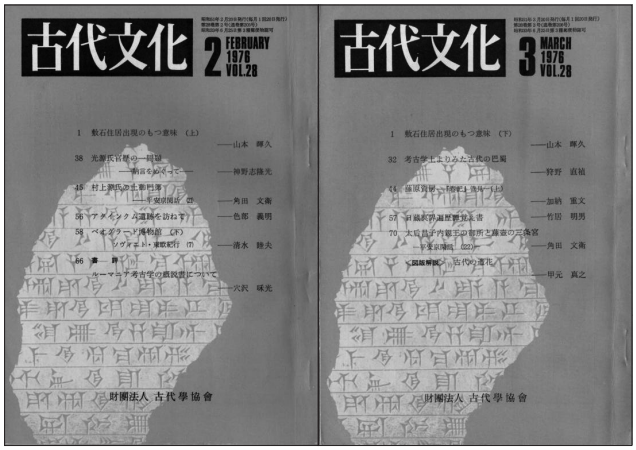
山本 暉久

19. 神奈川県職員としての考古学 その3
初めての論文発表

前回は、就職後に取り組んだ研究方法と研究対象の転換について記したが、今回は、それが研究成果となって結実した初めての発表論文について触れてみたい。

縄文中期を研究対象として初めに取り組んだのは、中期末以降、関東・中部地方の内陸部を中心として構築された「敷石住居」と呼ぶ特異な住居状施設についての研究であった。このテーマを選んだ理由は、第8回で触れたように、横浜市南区(当時)洋光台猿田遺跡から発見された、敷石をもたない柄鏡形住居址を自らが調査したことからであった。この柄鏡形住居址(第10号住と呼んだ)は、出入口部を異常に突出させた特異な形状をもつもので、全体の形状が柄をもつ柄鏡(手鏡)に似ていることから名づけられたものであるが、この住居の床面に石を敷設すれば、敷石住居と差はないことから、柄鏡形住居と敷石住居は一体としてとらえるべきとの立場から研究を進めると、両者はほぼ同時期の地域的な違いによるものだと考えるようになった。このことから、のちにこの両者の総称として「柄鏡形(敷石)住居」と呼び、敷石が敷設されている場合は、「柄鏡形敷石住居」、敷石が敷設されない場合は「柄鏡形住居」と呼び分けることとしたのである。そしてその研究目的は、こうした特異な住居が、どのような経緯から出現したのかという出現過程を明らかにさせることを通じて、その性格、とくに住居なのかどうかを明らかにすることにあった。私の研究の進め方は今も変わりがないが、テーマに沿って、その事例をできるだけ集めたうえで、その分析を通じて、歴史的な特性を明らかにするという徹底的な帰納法的手法をとるものである。そうした研究方法により得られた結論は、たとえ異論が多くとも、集成化された事例そのものは、いつまでも研究の基礎として残っていくというか、その後の研究の礎(いしずえ)となると思ったからである。

そうした方針から、まず、中期後葉～後期初頭期の敷石住居出現期に焦点を絞って事例を収集したのである。論文執筆当時は、全国各地で記録保存の名のもとに、地方自治体による行政調査が制度化され、多くの新たな調査成果が蓄積され始めた時期に相当し、新たな視点から論ずることが可能になりつつあった。こうして、約1年間を費やして、1974(昭和49)年12月に「敷石住居出現のもつ意味」と題する原稿を書き上げることができた。その原稿は、大学時代からたくさんの指導を受けてきた渡辺誠先生が、当時勤務されていた平安博物館が運営する(財)古代学協会刊行の月刊誌「古代文化」に渡辺先生の伝(つて)を頼って投稿することとした。



▲古代文化28-2・3号 1976

実は、ほぼ同じころ、やはり学部生・院生時代に渡辺先生とともに教えをいただいていた村田文夫さん(川崎市教育委員会)が、柄鏡形住居址についての論文「柄鏡形住居址考」をまとめられ、この論文が1975(昭和50)年11月、同じ『古代文化』第27巻11号に発表されたのである。多少、因縁めいた話になるが、村田さんとは、職場が川崎市教育委員会と神奈川県教育委員会という近い関係であることや、常日頃、村田さんから教えを受けていた関係もあり、敷石住居址や柄鏡形住居址について意見を交換する機会があり、村田さんからは共同執筆しないかとのお誘いもあったのだが、結局は別々に発表することとなった。ただ発表された論文をみると、村田さんとは考え方、解釈の違いが明らかであり、この二人の論文を契機として、敷石住居址の性格をめぐる論争が起こることとなった。

そのような経緯があったが、原稿投稿後、2年ほど経過して、1976(昭和51)年2月、3月に上・下に分けて連載された(古代文化第28巻2号・3号、写真参照)。この論文の末尾には、渡辺先生がコメントを書かれておられる。過分な評価とともに、その問題点が鋭く指摘されており、このコメントに対する答えをその後の研究で追求することとなった。当時、「季刊人類学」(京都大学人類学研究会編)に掲載された論文には、他の研究者のコメントが付されるというスタイルをとっていたが、考古学・古代史の専門誌として、掲載論文にコメントが付されるのは、今も当時も珍しいものといえる。そのような光栄に浴しつつ本稿は日の目をみることとなった。その後、柄鏡形(敷石)住居址をめぐる研究を重ねつつ、2001(平成13年)11月、早稲田大学大学院文学研究科に提出した学位論文『敷石住居址の研究』により博士(文学)の学位を授与された。このことは、また別に触れてみたい。

ところで、この初めての発表論文において、私は敷石住居の出現は、中期後葉に現れる、主として奥壁部に敷設された「石柱・石壇」に敷石敷設の起源が求められること、柄部(張出部)は、同じく中期後葉の住居に埋設された「埋甕」(うめがめ)に付随する小突出部にその起源が求められ、その両者が発展・融合して、典型的な敷石住居=柄鏡形(敷石)住居が中期末に完成したものと理解し、その性格は当時の一般的な住居と認識すべきであり、特殊な「施設」なのではなく、特異性は、中期末という時代、時代の変換点に求めるべきとの理解を示してみた。今もその考え方に変わりはない。

このようにして、ようやく考古学の研究者のひとりとして、歩み始めることとなった。今もこの論文への思い入れは強い。

略歴

1947年3月	新潟県東蒲原郡鹿瀬町(現・阿賀町)生
1965年4月	早稲田大学第一文学部史学科國史専修
1970年4月	早稲田大学大学院文学研究科修士課程
1973年4月	神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課
1978年5月	日本考古学協会員
1985年4月	神奈川県立埋蔵文化財センター
1990年4月～1998年3月	早稲田大学第一文学部非常勤講師
1997年4月	財団法人かながわ考古学財団
2001年4月～2002年3月	昭和女子大学・同大学院非常勤講師
2001年11月	早稲田大学大学院文学研究科 博士(文学)
2002年4月	昭和女子大学大学院生活機構研究科教授
2003年10月	第4回宮坂英弐記念 尖石縄文文化賞受賞
2010年9月～2017年3月	駒澤大学大学院人文科学研究科非常勤講師
2017年3月	昭和女子大学定年退職・名誉教授 現在に至る

隔月連載です。次回は工楽善通先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 249

蒲形陣屋 ～愛知県蒲郡市

松田 繁

蒲郡市について

蒲郡市は、愛知県の南東部、三河湾を望む海浜部に位置します。海岸線に沿って東西に長く、市内を取り巻くように山地が分布し、東から、御堂山(363.5m)、五井山(454.2m)、遠望峰山(439m)、三ヶ根山(320.7m)などが連なります。これらは、長野県南部や岐阜県恵那市などから続く美濃三河高原と呼ばれる隆起準平原の最南端の一部をなしており、山地は河川に開析されて市内では比較的急斜面になっています。近代以降、蒲郡ではみかんの生産が盛んになりますが、この地形は大きな要因の一つになっています。山麓からは三河湾に向かって緩やかに傾斜する蒲郡台地が広がり、また、開析谷の出口では扇状地が発達しています。海岸部は、かつて白砂青松の美しい海岸線が広がっていました。明治21年に東海道本線が開通すると、海上に浮かぶ竹島、三河大島、小島などの島々と三河湾の風景は、鉄道唱歌で「海の眺めは蒲郡」と唄われ、多くの文人墨客が訪れる観光地として名を馳せました。

蒲形陣屋設置以前の蒲郡

私の紹介する遺跡は、愛知県蒲郡市にある「蒲形陣屋」です。蒲形陣屋は、蒲郡市中心部に所在しています。江戸時代、西郡5千石の領主であった旗本竹谷松平家が築いたとされ、以降、陣屋を中心に宝飯郡西部の中心地として栄えました。

戦国期、蒲郡市内には各地に城が築かれました。蒲郡市中心部には、紀伊半島の熊野から進出した鵜殿氏が上ノ郷城や下ノ郷城を、西三河の松平郷から勢力を広げた松平氏が竹谷城や五井城を築き、それぞれ周辺を支配しました。両氏は、共に主家である今川の縁戚でもあり、婚姻を結ぶなど友好関係にありましたが、永禄3年(1560)の桶狭間の戦いの後、三河統一を目指す松平元康と今川家の関係が悪化したことで対立します。今川方についた上ノ郷鵜殿家は、桶狭間の戦いの翌々年に起こった上ノ郷城の戦いで家康に敗北、以降、鵜殿一族は松平氏に服属し、蒲郡市域は松平の支配下に置かれることになりました。天正18年(1590)、家康の関東移封により徳川家の家臣団が関東へ移ると、蒲郡市域を含む東三河一帯は、新たに吉田城主となった池田照(輝)政の支配地となります。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いで池田照政が播磨姫路へ転封となると、蒲郡市中心部は深溝西郡藩として1万石で入部した深溝松平忠利の領地となりました。慶長17年(1612)、それまで吉田城主だった竹谷松平忠清が急死し、竹谷松平家が無嗣断絶となると、竹谷松平家の廃絶を惜しんだ幕府の特別な措置により、忠清の弟清昌は西郡5千石を与えられて竹谷松平家は存続。清昌は蒲形に陣屋を構えると、以降は竹谷松平家が幕末までこの地を治めることになりました。

▲平成18年度調査時の土盛り断面

蒲形陣屋の発掘調査

蒲形陣屋では、平成15・18年度の市道建設、平成29年度の個人住宅建設と、3度の発掘調査が行われています。市道の建設に伴う発掘調査では、道路部分のトレンチ調査と道路敷設に伴い滅失する土盛りについて調査を行いました。調査の結果、道路部分からは、昭和初期まで存在した通称駒ヶ池と呼ばれる池を、個人住宅に伴う調査地では、溝6条、ピット24基を検出し、多量の瓦片と、中世後期から江戸時代にかけての土器、陶磁器の破片が出土しました。遺物は16世紀以降に限られたため、この場所が戦国期以降に拓かれた場所であったと考えられます。なお、陣屋の北西部には、中世後期に同地を治めた下ノ郷鵜殿家の下ノ郷城が所在し、永禄9年(1566)2月26日に当時の領主鵜殿長龍が示した「鵜殿長龍壁書」によると、鍛冶、番匠、紺屋、酒作、諸職人等の記載があり、付近に町が形成されていたことが分かっています。

蒲形陣屋出土の瓦

出土した軒丸瓦、軒平瓦は、文様が非常に繊細で細く、織豊期の様相を示しています。この軒瓦は吉田城出土の軒瓦に近似しており、吉田城の瓦が池田期と考えられることから、蒲形陣屋の瓦も同時期のものと思われます。また、丸瓦には布目痕、吊り紐痕が明瞭に残り、糸切り(コビキA)の痕跡が残るものもありました。コビキAは、天正期(1573～1593)に鉄線切り(コビキB)に切り替わると言われ、蒲形陣屋はA・Bの両方が存在することから、これらの時期に製作された瓦が使用されたと考えられます。吉田城は竹谷松平清昌が蒲形陣屋に入る前の居城で、次に吉田城に入った深溝松平忠利とは、忠利の妻が清昌の姉という関係でした。地理的にも血縁的にも近い両藩の居城で、酷似する瓦が出土しているため、無嗣断絶後に石高を減らして西郡に入った竹谷松平家に対して、親類の深溝松平家からの融通があったのではないかと考えています。また、輪違瓦、鯱瓦、鬼瓦など、5千石の旗本の割にはやや不釣り合いな遺物も確認されており、陣屋の性格については更に調べていく必要があると考えています。

おわりに

蒲形陣屋には、現在も一部土盛りが遺存していますが、周辺は住宅や商業地になっており、往時を偲ぶ遺構は本当に限られています。蒲郡に残る貴重な近世遺構として、市民の方への周知、適切な保存、そして活用できるよう今後も関わっていければと思っています。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは寺井崇浩さんです。

考 古学者の書棚

「歴史と風土の中で 山本学治建築論集①」

山本学治 著／シルバーシリーズ　鹿島出版会(1980)

奥野　麦生

はじめに

考古学を学ぶ者の中で、山本学治はあまり知られていない存在かもしれない。

山本は、東京大学建築科を卒業後、長く東京芸術大学で教鞭をとった建築学者で、特に建築史に精通していた人物である。

本書は、山本の後輩たちが主要な論文をまとめて刊行した論文集三部作の中の一冊で、2007年に鹿島出版会のSD選書243として再刊されている。

建築そのものに関しての難しいことは筆者の理解を超えている。しかし、本書に収められた論文の多くは、歴史や風土そして人々が積み上げてきた技術を山本が解題したもので、考古、民俗などの文化財に接する者にもよく理解できる。

山本が他界したのは1977年、すでに半世紀がたとうとしている。掲載論文はそれ以前に書かれたものである。しかし、物事の神髄を見抜いた文章は決して古臭いものではなく、得るものが大きいだろう。考古学を学ぶ者にとっても鑑とすべき内容の深い一冊である。

「歴史と風土の中で」を読む

本書は、3部構成で、各章に論文3編ずつが収められている。

第1部は「近代史の中の建築」と題されており、国際的な建築史の流れと建築の“近代化”や“形式主義”といった近代建築運動に基づく抽象的概念を“現実化”すべきだという山本の主張が読み取れる。こうした中で、日本の特に戦後の建物のことも扱われている。昭和20年代から40年代の日本の現代建築が朝鮮戦争や高度経済成長の中で変化していく様を論評している章段は、社会情勢を俯瞰しながら総合的に捉えられており、山本自身の目で見たであろうリアリティある内容は興味深い。

建築構造や技術を良く知る山本が論ずる現代建築評論が与えたであろう学会や業界への影響を思うとき、考古学を中心に地域史を扱う者にとっては、“評論家”が育ってこなかったことが非常に大きな課題であると改めて考えさせられた。

第2部は「エレメントの背景」と題した部分で、考古学を学ぶ者でなくとも読み物として読んでなるほどと思う興味深い部分である。例えば「窓のデザインの発展」では、欧米の歴史的建造物の窓枠デザインがなぜそのような形になったのかや建物の構造とデザインの因果関係、さらにはガラスを獲得する前の彩光用の素材の話など多岐にわたる。伝統的な日本建築の障子と中庭が作り出す空間なども一連の話題の中で昇華されていく。「空間概念としての壁」の章では、建物を生活空間として捉えたときの“壁”の存在を論じているが、話は竪穴住居の壁の問題から始まる。日々発掘調査に携わる我々としても大いに参考になる内容である、この内容は第3部へつながっていく。柱や炉の位置、住居址の外側へ展開する付属構造や集落全体の構造などを考えるとき、実に示唆に富む内容である。

第3部「素材と風土」は考古学を学ぶ者が読んで最も理解しやすい部分であろう。また、山本の研究者としての懐の深さを感じさせる部分でもある。

「金属発展の五段階」の章では、銅を視座に据えた技術革新と世界各地の文明の発達が論じられている。素材の特性を良く知り特性に合わせた使い方をすることで時代とともに生活を豊かにしてきた先人の知恵に目を向けているのである。次の「建築と銅について」の章は、前章を受けてさらに一歩踏み込み金属加工の歴史的流れとそれを生み出す人間の創造力、叡智など形のない事象にも言及する。こうした中で日本の金属利用の歴史も当然論じられている。話題は弥生時代の銅鐸、銅剣やその文化的影響、奈良時代の鋳造仏の技術的側面とその豊かな表情が与えた信仰への効果、さらには伊勢神宮、出雲大社などの歴史的な建造物と銅との関係性、やがて江戸時代の庶民の暮らしの中に溶け込んだ銅の醸し出す生活の雰囲気にも広がる。かつて読んだ、V.G.チャイルドやH.J.エガースらの論じる考古学の基礎論とも通底する文明論に思える。

最終章「木による日本の建築はどんな特徴があるのだろう」は、1975年刊行の『森のめぐみ−木と日本人』(ちくま少年図書館28・筑摩書房)に収められた一文で、山本が最後に著した中・高校生へ向けたメッセージ性の高い文章である。同書の併読もお勧めする。冒頭山本は和辻哲郎の『風土』をもとに“風土”と建築が密接につながっていることや住居内の空間利用、住居における屋内と屋外とのつながりなどを考えている。洋の東西はもちろん、竪穴式の住居跡から土間式の民家そして貴族の寝殿造りまで時代を超越し幅広く論じられる。山本はこうした建物の違い個々の形式を学ぶことで「いろいろな時代とそれぞれの地方に生きた我々の祖先の主体的な生き方を、またその英知の高さと感情の深さを学ぶことができるはず」であり「現代の中でその知恵を生かしていきることはできる」と結んでいる。

本書を読むと、幅広い視野とそれらに通暁する知識を持った山本の建築に対する眼差しと、建築をいかに市民の生活に生かすべきか、そしてそれを若者たちにも伝えたいという熱い思いが伝わってくる。

結びに代えて

筆者は近年、勤務する自治体の「文化財保存活用地域計画」を作成した。この作業は、文化財はもちろん地域の自然環境や地理的特徴などによって育まれた地域の歴史文化の特色を把握するところから始まる。“関連文化財群”を作りストーリーやキーワードでつなげた文化財は、単体で存在したときとは全くといってよいほど違った表情を見せる。

指定や登録とは異なる新たな文化財の守り方は、これまでとは違う方法で時空を超えて存在する文化財の普遍的な価値観を問い続ける先にこそ存在する。文化財の仕事は息の長い仕事だ。時に不安になることもある。そんなとき、本書を通じて届けられる山本のことばは実に温かく、道を照らしてそっと背中を押してもらったような、そんな気がした。

アルカ通信 No.257
発行日 2025年2月1日
企　画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所 (株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL：http://www.aruka.co.jp